

## アナログアキュライザーの展開(37)

### —音源比較(37)—

#### 1. 始めに

前報(36)に引き続いて、アナログアキュライザーとバランスアナログアキュライザーの効果を受けつつ、フォーマット違いの各種音源を切り替えて比較試聴していきます。

#### 2. アナログアキュライザーの適用と試聴方法

アナログアキュライザーの活用(19)からアナログアキュライザーの活用(21)までの検討結果を要約すると次のようになります。

アナログ音源再生時の適用

ステップアップトランス Stage1030 の入力端子

フォノイコ Brooklyn DAC+の出力端子

fidata 収納および TIDAL における MQA 音源のストリーミング再生時の適用

DA コンバーターBrooklyn DAC+の出力端子

その他のデジタル音源再生時の適用

DA-3000 の入力端子 (Ex-Pro の出力後) 前報(36)以後 BACU-2000 使用

DA コンバーターBrooklyn DAC+の出力端子

今回も上記のルートでハイドンの交響曲第 94 番「驚愕」を聴いていきます。

アナログ

SERAPHIM EAC-30031

トーマス・ビーチャム指揮ロイヤルフィルハーモニー

fontana FG-84

ヴォルフガング・ザヴァリッシュ指揮ウイーン交響楽団

CD

PILZ 160156

アルフレッド・ショルツ指揮フィルハーモニカ・スラヴォニカ

ANC-100

ピエール・モントウ指揮ウイーンフィル

EMI TOCE 13141

シェフリー・テイト指揮イギリス室内管弦楽団



## BPODCH

2001年5月1日ヨーロッパコンサート収録

マリス・ヤンソンス指揮ベルリンフィル



### 3. アナログアキュライザーの試聴結果

アナログのビーチャム盤は、録音も古いようで、盤質も良くないのですが、ゆったりとした悠揚迫らざる演奏であることは伺えます。

アナログのザヴァリッシュ盤は、前報(36)のハイドンの交響曲第92番「OXFORD」の印象と同様、やや華や、かつ軽快で艶やかな印象です。

CDのショルツ盤は、あまり名前を聞かない指揮者とオーケストラですが、落ち着いた良い演奏で、廉価盤の割には音も良い方です。

CDのモントウ盤は、モントウらしい優雅な演奏でウーンフィルの繊細で柔らかな音色が楽しめます。

CDのテイト盤は、イギリス室内楽団らしい爽やかな演奏です。

BPODCHのヤンソンス指揮の演奏は、2001年のイスタンブールでのヨーロッパコンサートの収録です、画像からするとモスクではなく、古いキリスト教の教会のようなところでの演奏です。若いヤンソンスが颯爽と指揮をしており、現存するメンバーの若い顔も見られます。収録年代が遡りますが、アナログアキュライザーとバランスアナログアキュライザーの効果で、予想外に細かい表現も聴くことができます。

#### 4. まとめ

ハイドンの交響曲第 94 番について、アナログアキュライザーとバランスアナログアキュライザーの効果を取り入れた、メディアや再生経路違いの音質や演奏の比較が容易にできるようになりました。

以上